（岩倉紙芝居館古典館[http://hjueda.on.coocan.jp//koten/koten.htm](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm)　　宰主　上田啓之）

以下は、読書会に備え調べたこと、読書会での議論はリンク先をご覧ください。

衛靈公第十五

１）衛靈公問陳於孔子孔子對曰俎豆之事則嘗聞之矣軍旅之事未之學也明日遂行
wèi líng gōng wèn zhèn yú kǒng zǐ kǒng zǐ duì yuē zǔ dòu zhī shì zé cháng wén zhī yǐ jūn lǚ zhī shì wèi zhī xué yě míng rì suí xíng
衛の靈公、孔子に陳を問ふ。孔子、對へて曰はく、｢俎豆の事、則ち嘗てこれを聞く、軍旅の事、未だこれを學ばざるなり、明日遂に行る。

陳zhènは陣zhènと同じ、軍隊の戦闘形態のこと。司馬遷、「衛の靈公、孔子來ると聞き、喜びて、郊迎し、問ひて曰く、「蒲、伐つべきか」對へて曰く、「可。」靈公曰く、「吾が大夫、不可と以爲（おも）ふ。今、蒲、衛の晉・楚に待す以所（ゆえん）なり、以て衛これを伐つは、不可ではないか。」孔子曰く、「其の男子、死ぬ志有るも、婦人、西河を保つ（退く）の志有り。吾が伐つ所の者、四・五人に過（すぎ）ず。」靈公曰く、「善。」然れども、蒲を伐たず（孔子世家）。」と記している。この時は軍の事を孔子に問ひ、孔子の進言を実施しなかった。靈公が老ひて孔子を用ゐず、孔子は衛を行（さ）り、晉の趙簡子を頼るが、趙簡子が竇鳴犢、舜華という彼を支えた賢大夫を殺したことを知り、仕官をあきらめ、魯の陬郷に帰り、陬操（曲名）を作り哀悼し、その後、衛に反へり、蘧伯玉の家に投宿していたときの出来事（孔子世家による）。靈公が何故陳を訪ねたのかは不明である。俎豆とは禮器のこと。周禮、小司徒職に云く、「五人を伍と爲す。五伍を兩と爲す。四兩を卒(100)と爲す。五卒を旅（500）と爲す。五旅を師（2500）と爲す。五師を軍（12500）と爲すなり。」孔子は禮器の陣形は聞いているが、軍旅の陣形は學んでいない、と応へた。明日（めいじつ：あくるひ）遂に行（さ）る。とある。孔子が無礼と思って、去ったと解釈されるが、孔子世家では、「明日、孔子と語り、雁、蜚(とぶ)を見る。これを仰ぎ視て、（顔）色、孔子に在ざる（孔子の話を聴くどころでなかった）。孔子遂に行（さ）る」としている。司馬遷は明くる日も二人の会話があり、靈公が雁が飛ぶ隊列を眺めてぼんやりしているのを見て、孔子は衛を去ることを決めたとしている。しばらくして、靈公は死ぬ、孔子が60歳のときとされる。靈公は隊列に心を奪われていた、その後の出来事からすれば、これは相続の問題であったのかもしれない。実に、靈公はこの相続の陳に関する孔子の考えを聞きたかったのかもしれない。

読書会：[2008年12月13日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年12月13日)

２）在陳絕糧從者病莫能興子路慍見曰君子亦有窮乎子曰君子固窮小人窮斯濫矣

zài chén jué liáng cóng zhě bìng mò néng xīng zǐ lù yùn xiàn yuē jūn zǐ yì yǒu qióng hū zǐ yuē jūn zǐ gù qióng xiǎo rén qióng sī làn yǐ
陳に在して糧を絕つ。從者病みて能く興る莫し。子路慍りて見へて曰く、君子も亦窮すること有るか。子の曰はく、君子固より窮す、小人窮すれば斯に濫る。

孔子世家に、「孔子、陳と蔡の閑（間）に在（ま）すと聞き、楚、人をして孔子を聘（へい）せしむ。孔子、將に往きて禮を拜せむとするに、陳、蔡の大夫、謀りて曰く、｢孔子、賢者にして、刺譏（しき：せめそしる）する所、皆、諸侯の疾（やまい）に中（あた）る。今は、久しく陳、蔡の間に留まりて、諸大夫が設け行ふ所、皆、仲尼の意に非ず。今、楚、大國なりて、孔子を來聘（らいへい）して、孔子、楚に用ゐられば、則ち陳、蔡の事を用ゐる大夫、危ふからむ。｣是に乃ち相（あ）ひ與（とも）に徒役を發し孔子を野に圍む。行くを得ずして、糧（かて）絶つ。從者病みて（疲れ果て）、能く興（おこ）す（活動する）莫し。孔子、（書経を）講誦（詩経を）弦歌して衰へず。子路、慍（うら）みて見（まみ）へて曰く、“君子、亦た窮すること有りや。”孔子曰く、“君子、固（もと）より窮す、小人、窮すれば斯に濫（らん：みさかいがなくなる）す。”」とある。

司馬遷が創作したと思はれる荒野の対話がその後に続く場面である。子貢を楚の昭王の下へ派遣して、軍を送りこの難を逃れることが出来たとされる。窮したときに、（書経を）講誦（詩経を）弦歌して衰へぬが君子で、子路のごとく直截に慍すが小人というか？子路が率直に孔子の無策を怒り、子貢を楚に派遣する決断をしなくば、万事窮したことであろう。

読書会：[2008年12月13日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2008年12月13日)

３）子曰賜也女以予為多學而識之者與對曰然非與曰非也予一以貫之

zǐ yuē cì yě rǔ yǐ yǔ wèi duō xué ér zhì zhī zhě yú duì yuē rán fēi yú yuē fēi yě yǔ yī yǐ guàn zhī
子の曰はく、賜、女、予を以て多に學びてこれを識る者と為すか。對へて曰く、然り。非ざるか。曰はく、非ざるなり、予は一にして以てこれを貫けり。

義疏は、「時の人孔子を多く學びて識る、と見、孔子、多く世事を學びてこれを識ると竝びて謂ふ。故に孔子、子貢に問ひてこれを釋すなり。然りかくの如きなり。子貢、答へて云く、賜も亦、孔子多く學びて、故に、かくの如く、多くこれを識るなりと謂ふ。子貢も又孔子、多ならずして識るを嫌ふ。故に更に定めるを問ひて云ふ、非ざるか、非與か、辭定まらず。孔子、又答へて曰はく、｢非ざるなり、言又多く學びてこれを識るに非ずと定むなり。貫は猶穿なり。既に答へて曰はく、非ざるなり。故に、これ更ち多く學ばずしてこれを識る由の所以を答へるなり。我が多く識るの所以を言はば、我、一を以てこれを善くし理が萬事を貫き穿ち、而して萬事自然から識るべし、故に、これを知り得、故に予、一以てこれを貫くなりと云ふ。」子貢は世人が孔子を評すると同じ目線で見ており、当然孔子が同意するものと思い、そうじゃないのですか、といぶかったと見ている。万物を貫く原理をもって処すれば、自ずから万事に対応できるという解説となっている。「多く聞いて疑わしきを闕き、愼んで其の餘りを言うときは、則ち尤（とが）寡し。多く見て殆きを闕き、愼んで其の餘りを行う（[以為篇18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm)）」ともある。しかし、何をもって約すかを孔子は重要視していた。「子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯・・・（[里仁篇15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm)）」とあり、曾子のみは、いわれなくても孔子の「一以貫之」が分かっていた。集註は、「貢學ぶこと多くして能く識す。夫子其の本づく所を知らんと欲す。故に問いて以て之を發（おこ）す。方に信じて忽（たちまち）に疑う。蓋し其の學を積つむの功至りて、亦將に得ること有らんとするなり。說は第四篇に見ゆ。然れども彼は行を以て言いて、此は知を以て言うなり。」とする。子貢は学ぶこと多く、博学であり、その本づくところを子貢がどう考えているかを自覚させるために孔子は問いを発した。子貢は学を積んで功に至り得るもの、先生もそこは同じと思い、然りと答えた。しかし、実は里仁第四にあったごとく、先生は「予一以貫之」であった。曾子はその行いをもってそれを言ひ得た、しかし、子貢は知として言ふことになった、とでもなろうか？宋代の学者達は曾子と子貢の理解力の相違をとりあげた。理を説明することが大きな課題であったことによる。
司馬遷は、前段の陳と蔡の間の事件に際して、子路に次いで子貢が色を作（な）していたときに孔子が語った言葉としている。窮地に陥った博学の師と思うかしれないが、違う、一つ道を貫く、と子貢に決断を示したことになろうか。昭王の下へ子貢を派遣し、仕官の可能性を探らせた。

司馬遷、孔子世家に曰く、「子貢、色を作(な)す。孔子曰く、｢賜（子貢）よ、爾（なんじ）以て予を多く學びてこれを識る者と爲すか。｣曰く、｢然り。非（あら）ずや。｣孔子曰く、｢非ざるなり。予、一を以てこれを貫ぬかむ。｣ 孔子弟子に慍心有るを知り、乃ち子路を召（よ）びて問ひて曰く、「詩に雲（い：云）ふ。『兕（じ：犀）に匪（あら）ず虎に匪ず、彼の曠野に率（したが）ふ（詩の小雅、何草不黄篇の一節。周の幽王の時代。犀、虎とは武人。広野を賦役にかりだされた人夫が武人に引きまわされる様を記したもの。）』。吾が道、非ずや（私の道は間違っているのか）。吾、此に何を爲さむ（私はどうするべきと思うか）。」子路曰く、｢意者（おもふに）吾、未だ仁ならざるや。人、我を信ぜざるなり。意者、吾、未だ知ならざるや。人、我を行はざるなり。｣孔子曰く、｢是有らむか（そうであろうか）、由よ、譬（たとへるに）仁者をして必ず信ぜしむれば、安（いづくん）ぞ伯夷﹑叔齊（仁者でありながら容れられず餓死した）有らむ。知者をして必ず行はしむれば、安ぞ王子、比幹（比干：ひかん：殷の皇子、知者で諫言し殺された）有らむ。｣
　子路、出でて、子貢、入りて見ゆ。孔子曰く、｢賜よ、詩に雲ふ。『兕に匪ず虎に匪ず、彼の曠野に率ふ。』吾が道、非ずや。吾、此に何を爲さむ。｣子貢曰く、｢夫子の道、至大なり、故に、天下能く夫子を容れるところ莫し。夫子、蓋し少し貶（おとし）めむ。｣孔子曰く、「賜よ、良農能く稼（か：植えつける）して、穡（しょく：取り入れる）すること能はず。良工能く巧（たく）みたりて、順（使ってみて具合がよい）すること能はず。君子、能く其の道を修め、これを綱して（大原則を通し）紀し（細則を付す）、統べて（全体をととのへ）理す（筋道をたてる）。而して容らること能はず。今、爾（なんじ）、爾の道を修め、容らるを求む（道を修めるより用いられることを願う）。賜よ、而して志、遠からず（遠大でない）。」
　子貢出でて、顔回、入りて見ゆ。孔子曰く、「回や、詩に雲ふ。『兕に匪ず虎に匪ず、彼の曠野に率ふ。』吾が道、非ずや。吾、此に何を爲さむ。｣顔回曰く、｢夫子の道、至大なり、故に、天下能く夫子を容れるところ莫し。然りと雖も、夫子、推してこれを行ふ、容られずして何ぞ病まむ。容られずして、然る後に君子に見ゆ（道を修めてこそ君子たりえる）。夫れ道の修まらざる、是れ吾が醜（はぢ）なり。夫れ道、既に已（はなはだ）大きく修まりて用ゐられざる、是れ國を有（たも）つ者の醜なり。容られざるを何ぞ病まむ。容られずして、然る後に君子に見ゆ。｣孔子、欣然として笑ひて曰く、｢是れ有る哉（そのとうり）。顔氏の子。爾をして財多ければ、吾、爾の宰と爲らむ。｣
　是に、子貢を楚に至らしむ。楚の昭王、師を興し（軍を発し）孔子を迎へる。然る後に、（包囲を）免がるを得る。」

諸侯を補佐し、周公の道を復興する道は幻と化し、放浪は無に帰した。次いでわが子や顔淵、子路を失い、天我を喪ぼせり、と嘆じる老境のなか、春秋や易の注釈に傾倒される先生が辿られた道は、学而第一に、「學びて時に之を習ふ、また、説（よろこばし）からずや。朋有りて遠方より來る、また、樂からずや。人知らざるも慍（うら）みず、また君子ならずや。」凝縮されていまいか。

読書会：[2009年1月8日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年1月8日)

４）子曰由知德者鮮矣

zǐ yuē yóu zhī dé zhě xiǎn yǐ
子の曰はく、由、德を知る者は鮮し。

集註に、「第一章より此に至るまで、疑うらくは皆一時の言なり。此の章蓋し慍り見ゆる爲に發すらし。」とある。義疏に、「由は子路なり。子路を呼びてこれを語（つ）ぐなり。夫れ徳を知る人、得難たしと云ふ。故に少（すくな）しと爲すなり。按如注意、則ち孔子此の語を糧絶へる問に爲し、これを發すなり。」ともあり、ここまでの言葉はすべて、陳と蔡の間の事件に発された言葉とみていることになる。弟子達の慍り見ゆるに、孔子が、子路に、徳を知れと諭した、とになろう。窮地にあって弟子に自分の徳を信じよとする孔子を支えるものは何であったのか？孔子が仕官というものから異なる生き方に向かう転換点であったことはすでに見た。次条で舜は無為にして治めた、とある、舜は己を恭（つつ）しみて南面するのみで、禹、皐陶、契、后稷、伯夷、虁、龍、倕、益、彭祖といふ蒼々たる臣が仕事を行ひ、天下が治まった。そういふ事を学んだにもかかわらず、大変な窮状であったことは疑いをえないが、慍り見せる弟子に向かって、知德者鮮矣は叱責といふよりは、自戒の念を含めた、落胆の気持ちが強いと思はれる。
読書会：[2009年1月15日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年1月15日)

５）子曰無為而治者其舜也與夫何為哉恭己正南面而已矣

zǐ yuē wú wéi ér zhì zhě qí shùn yě yú fú hé wéi zāi gōng jǐ zhèng nán miàn ér yǐ yǐ
子の曰はく、無為にして治むるは其れ舜なるか。夫れ何をか為さむ。己を恭しみて、正に南面するのみ。

義疏に、「舜、堯の禪を己に上受し、己又禹に下禪す、受授人を得る。故に孔子舜の無爲にして能く治むを歎ずるなり。既に善を授受し人を得て、情慮に勞ふ無し。故に、夫れ何をか爲さむと云ふなり。既に垂拱（腕を組む）して民自ら治む。故に、自ら恭敬して天位に居り正に南面する所以のみ。」集註に、「すること無くして治まるは、聖人の德盛んにして民化せばなり。其の作爲する所有るを待たざるなり。獨り舜を稱するは、堯の後を紹（つ）ぎ、而して又人を得て以て衆職を任ず。故に尤も其の有爲の迹を見ざればなり。己を恭しくしては、聖人の敬德の容なり。旣にする所無くば、則ち人の見る所此の如きのみ。」禪は帝位、あるいは、帝位を譲ること。堯は帝位を舜に譲るが、舜は堯の子、丹朱に譲る。しかし、天下は舜に帰した。舜は帝位を禹に譲るが、禹もまた舜の子、商均に帝位を譲ったが、諸侯は禹に帰した。「禹、皐陶、契、后稷、伯夷、虁、龍、人垂、益、彭祖、は堯の時より推挙されていたが、いまだ職を分掌されてはいなかった。舜は文祖（堯の始祖の廟：任官は廟前で行う）にゆき、四嶽（岳）に謀り、四門を開き、四方の耳目に通じ（人材を発掘）、十二牧（十二州の長官）を命じた。帝の徳を論じ、厚く徳を行い、佞人（言葉巧みにとりいる人）を遠ざけるなら、蛮夷も率先して服するであろう。」無為而治とは、舜は堯の信を得たのみならず、堯の下にいた数々の人材の信を得て、それぞれに相応しい地位と役割を分掌せしめた。それぞれが国政の基礎を、後の言葉でいえば、土木、農業、租税、軍事、司法、教育等々の大臣の仕事を任せたことをいふ。本人が何をしていたかといへば、恭己正南面而已矣。己を恭（つつし）みて、百姓（姓のある諸々の氏族）に南面し、中を執った。中が立つことにより諸相の機能と働きがますます際立った。

読書会：[2009年1月15日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年1月15日)

６）子張問行子曰言忠信行篤敬雖蠻貊之邦行矣言不忠信行不篤敬雖州里行乎哉立則見其參於前也在輿則見其倚於衡也夫然後行子張書諸紳

zǐ zhāng wèn xíng zǐ yuē yán zhōng xìn xìng dǔ jìng suī mán mò zhī bāng xíng yǐ yán bù zhōng xìn xìng bù dǔ jìng suī zhōu lǐ xíng hū zāi lì zé jiàn qí sān yú qián yě zài yú zé jiàn qí yǐ yú héng yě fú rán hòu xíng zǐ zhāng shū zhū shēn

子張、行を問ふ。子の曰はく、言、忠信にして、行、篤敬ならば、蠻貊の邦といへども行はる。言、忠信せず、行、篤敬せずば、州里といへども行はれようや。立ちて則ち前に其の參を見るなり、輿に在りて則ち衡に其の倚を見るなり。夫れ然る後に行はる。子張これを紳に書す。

子張が行を問ふた。一般的には、道を学んだ者が実践するについて問うことになろう。義疏に曰く、「人身を立て世に居りて善を修め、若し事（つかへること）を爲して其の事を道（みちび）くを問ふ。世に行を得べしか。答へるなり。云ふ、世に道をして行はしめんと欲（おも）ふ者は、言出でて必ず忠信せしむ、行立ちて篤厚恭敬必須なり。若し身自ら脩め徳を前（すす）め、華夏（中国）に居處すは無論、假に蠻（南蠻）貊（北狄）遠國に居住せしめらるも、則ち己の道徳行はれざるところ無し。又云ふ、若し身を脩め徳を前めること能はずして身、中國州里の近くに居すと雖も、而して行ふ所、亦、皆行はず。故に行ふかなと云ふ。言、行はれざるなり。此れ王畿の遠郊の内外の民の居する地名なり。參は猶森（連なること）なり。言、若し敬徳の道、己を行ひ、立ちて世間に在らば、則ち自ら想ひ忠信篤敬の事を見る。森森として滿ち己の前に亘るなり。倚は猶憑依なり。衡は車衡の軛なり。又、若し車輿の中に在りて、則ち亦、自ら想ひ忠信篤敬の事を見て、憑依を羅列して衡軛の上に滿つなり。若し能く行ひて想に存して忘ず、事事（すべてのこと）前の如し、則ち此れ人身往くことなく行はれず、故に云ふ、夫れ然る後に行はるなり。紳は大帶なり。子張、孔子の言を聞きて重きとすべし。故に己の衣の大帶に書題す。日夜在録し忘れぬを欲ふ。」集註は、子張が達を問うた時、禄を問うた時と同じく、外面的なことではなく、内面的なことを孔子が諭しているとみる。孔子は忠信の心無くして口にする言葉、篤敬の心無くして行われる行為では、世の中には通じないとした。それは華夏でも蠻貊でもおなじことといふ。立則見其參於前也在輿則見其倚於衡也が何のことか解釈が分かれる。義疏は參は森、倚は憑依、立てば目前に連なっている（臣下達）、車輿では衡軛（横木）に憑依し満つる（臣下達）を見て想い忠信篤敬たれとなろうか。集註は、參は「我と相參するを言うなり。」倚には言及なく、「言うこころは、其の忠信篤敬に於て、念念忘れず、其の在る所に隨いて、常に見ること有るが若く、頃刻も之を離れんと欲すと雖も得可からず。」と忠信篤敬であっても得難いものであるとするのみ。立てば忠信篤敬を目の前に見る、車輿では衡軛に忠信篤敬が依り付くのを見る、立てば真っ直ぐ前を見、車輿では衡軛の寄りかかり威儀を正す等々の釈がある。夫然後行とはそういうことが出来てこそ行はれるの義。子張はこれを紳、衣服の帯に書いたといふ。司馬遷は、この子張の質問は陳と蔡の間、囲まれて困窮の極みにあった時に、なされたと考えた。つまり、万事窮した孔子に、子張が行を問うとなれば、先生の行が実現していない、どころか窮しているさなかであり、先生の行とは何ですかという極めてストレートな孔子への批判となる。孔子は楚での仕官を考えていた。楚は当時では南蛮である。そこであっても、忠信篤敬であれば通用する、心配しなくてよい、とくれば、子張は、今がどうにもならないのに、なんと現実離れした弟子の心配を想定しておられるのか、これではどうしようもないとあきらめかけたが、次の言葉を聞いて仰天した。立則見其參於前也在輿則見其倚於衡也夫然後行。（この窮地にあっても）子張よ私は立てば目前に民を見、車輿では目前の輿に倚る民を見ている。いかなる時も、その心構えを失っては、行はれることはない。子張は一言とて間違ってはいけないと、あわてて衣にそれを記した。劇的な司馬遷である。

[読書会：2009年1月24日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年1月24日)

弟子の曾参の字は子輿。参と輿には関係があるはずです。立って目の前に何か沢山並んでいる。それは輿と関係があるはずです。何かを確認している、乗る前に、乗ってからは牛と車の関係がきちんとしているか確認しながら車を進めている。[爲政篇22](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm))に「人而無信不知其可也大車無輗小車無軏其何以行之哉（人にして信なくば其の可を知らざるなり。大車に輗なく、小車に軏なくば、其れ何を以てかこれを行らむかな。）」とあり、人間であって信がないとダメ、何で以て行うのか？何以行之哉には、車を進めるようなイメージがある、と成田君。そういえば、子張と孔子の年齢差は46歳、陳と蔡の間では、15歳の少年、輿の運転で道を説いた。「子張、政を問ふ。子の曰はく、ここに居りて倦むこと無く、これを行ふに忠を以てす。（[顔淵14](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）」とあり、あきっぽく、雑なところがあった。輿の運転に例えて、集中すること、一心不乱に行はねば損じることを示されたのであろう。

７）子曰直哉史魚邦有道如矢邦無道如矢君子哉蘧伯玉邦有道則仕邦無道則可卷而懷之

zǐ yuē zhí zāi shǐ yú bāng yǒu dào rú shǐ bāng wú dào rú shǐ jūn zǐ zāi qú bó yù bāng yǒu dào zé shì bāng wú dào zé kě juàn ér huái zhī

子の曰はく、直かな史魚、邦に道有りて矢の如し。邦に道無くして矢の如し。君子かな蘧伯玉、邦に道有りて則ち仕へ、邦に道無くして則ち卷きてこれを懷にすべし。

集註に、「史は官名。魚は衛の大夫、名は鰌（しゅう）。矢の如しは、直を言うなり。史魚自ら賢を進めて不肖を退くこと能わざるを以て、旣に死しても猶尸を以て諫む。故に夫子其の直を稱す。事は家語に見ゆ。」とある。「孔子家語」困誓篇二十二はすでに[憲問篇26](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kenmon.doc)でみた。「『古の烈しくこれを諫めし者も、死すれば則ち止む。未だ史魚の若く、死して死諫（しかん）し、忠その君を感ぜしめし者あらざるなり。直と謂うべからずや』」、と孔子の言葉があった。衛の大夫で史官の鰌は、生きている間、彌子瑕（びしか）を避け蘧伯玉を用いるように霊公に直言して諌めたが容れられず、死しては自らの屍を曝して霊公を諌めた、さほどに直であった。彌子瑕は霊公の寵姫、母の病気を見舞うに禁制の霊公の車を使ったが霊公に孝行と称され、食べさしの桃を差し出され、自分に対する愛の深さと霊公がその無礼を愛（いつく）しむ始末であったといふ。[韓非子列伝](http://www17.ocn.ne.jp/~ichitubo/shiki/63loushikanpi.html)では、彌子瑕の容色が衰えると、裏目にでて逆鱗に触れるという話となる。史魚がそれに命を賭けてまで諌めねばならなかったというのでは、あまりにおぞましい。南子と同じく、政治的にも手腕があり、史魚も困りはてるほどでなくば、犬死ではないか。直といふに哀悼の気持ちがなかろうか。私ならそうはしなかった。孔子も、南子に手をやいて、衛を出ることになった。そんなややこしい状況にあって、蘧伯玉はその才徳を懐にしまいこんで政治から遠ざかり知らぬ顔をしていることができた。集註に、「卷むは收むるなり。懷るは藏（かく）るなり。」とする。なんと君子ではあるまいか。霊公が死せる史魚により正気にかえれば、仕官する。これは孔子にはできない芸当であった、といふより、君子と称するも、それは私のやり方ではないなあといふ感慨がある。

[読書会：2009年1月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年1月29日)

８）子曰可與言而不與之言失人不可與言而與之言失言知者不失人亦不失言

zǐ yuē kě yǔ yán ér bù yǔ zhī yán shī rén bù kě yǔ yán ér yǔ zhī yán shī yán zhì zhě bù shī rén yì bù shī yán
子の曰はく、言を與にすべくしてこの言を與にせずば人を失ふ。言を與にすべからずをこの言を與にすれば言を失ふ。知者は人を失はず、亦、言を失はず。

「與に言う可くして、之と言わざるは、人を失う。與に言う可からずして、之と言うは、言を失う。」とも訓じられる。動詞を與とするか言とみるかの違い。同意すべき言葉に同意しなければ、人を失う。同意すべきでない言葉に同意すると、その言葉に真がなくなる。直言してくれる者の言葉を容れなければ、その人は去り、同意できぬ君の言葉に同意すれば、あなたの言葉に信用がなくなる。それで知者といへようか。

[読書会：2009年1月29日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年1月29日)

９）子曰志士仁人無求生以害仁有殺身以成仁

zǐ yuē zhì shì rén rén wú qiú shēng yǐ hài rén yǒu shā shēn yǐ chéng rén

子の曰はく、志士仁人、生を求めて以て仁を害すること無し、身を殺して以て仁を成すこと有り。

孔子は放浪の旅において命を落としかねぬ事態に何度か遭遇した。「朝に道を聞かば、夕べに死すも可なり（[里仁篇８](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm)）」士はかくあるべきといふ。集註に、「志士は、志有るの士。仁人は、則ち成德の人なり。理の當に死すべくして生を求むれば、則ち其の心に於て安からざるもの有るなり。是れ其の心の德を害うなり。當に死すべくして死せば、則ち心安んじて德全し。」人は、死すべき事態に陥ると、己が生き残れるなら他者を犠牲することを憚らない。士を志すならば、さようなことで仁を害してはならぬ、と先生はおっしゃる。伯夷と叔斉は、武王が殷を武力で打倒することを身を以て諌め、首陽山で餓死した。世人はこれを哀れんだが、先生はこれを仁を求めて仁を得たと称揚された。先生はその人とその言葉を人々の心に蘇へらされた。
読書会：[2009年2月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年2月７日)

10）子貢問為仁子曰工欲善其事必先利其器居是邦也事其大夫之賢者友其士之仁者

zǐ gòng wèn wéi rén zǐ yuē gōng yù shàn qí shì bì xiān lì qí qì jū shì bāng yě shì qí dà fū zhī xián zhě yǒu qí shì zhī rén zhě
子貢、仁を為すを問ふ。子の曰はく、工其の事を善くせむと欲し、必ずや先ず其の器を利す。是の邦に居ては、其の大夫の賢なる者に事へ、其の士の仁なる者を友とす。

子貢が仁を為すとはどういふことでしょうかと問ふた。子貢は仁とは何かを聞くよりも、仁を為す、どういう行為が仁を為すことになるのか、引力とは何かでなく、引力が働くとはどういうことかと聞いた。これなら分り易い答えが得られるだろうと、子貢は考えた。先生は、「工（職人）は善い仕事をするには、必ず先立って、器（道具）を利（とぐ）。この邦とはどの邦か分からないが、ある邦に居て仁を為そうとするなら、その邦の大夫の中でも賢者に仕え、士の中でも仁者を友としなさい。」と仁を為すことではなく、まずその前に自分を磨くよう忠告された。集註に曰く、「程子曰く、子貢仁をせんことを問う。仁を問うに非ず。故に孔子之に告ぐるに仁をするの資（たすけ）を以てするのみ、と。」これは心構えを云ふ。また、曰く、「夫子嘗て謂う、子貢己に若かざる者を悦ぶ、と。故に是を以て之に告ぐ。其の嚴憚切磋する所有りて以て其の德を成さんと欲するなり。」子貢が己に及ばぬ者を集めて悦ぶところがあり、まず、それを直すことを戒めた。[学而篇15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm))で「子貢が曰く、貧しくして諂ふなく、富みて驕るなし。何如。子の曰はく、可なり。未だ、貧しくして樂しみ、富みて禮を好む者に若かざるなり。子貢が曰く、詩に云ふ、切すが如く、磋すが如く、琢すが如く、磨すが如し。其れ斯の謂ひか。子の曰はく、賜や始めて與に詩を言ふべきのみ。諸に往を告げて來を知る者。」かくて子貢、己を磨くことに目覚めた。
読書会：[2009年2月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年2月７日)

11）顏淵問為邦子曰行夏之時乘殷之輅服周之冕樂則韶舞放鄭聲遠佞人鄭聲淫佞人殆

yán yuān wèn wéi bāng zǐ yuē xíng xià zhī shí chéng yīn zhī lù fú zhōu zhī miǎn yuè zé sháo wǔ fàng zhèng shēng yuǎn nìng rén zhèng shēng yín nìng rén dài

顏淵、邦を為めるを問ふ。子の曰はく、夏之時を行ひ、殷之輅に乘り、周之冕を服し、樂は則ち韶舞、鄭聲を放ち佞人を遠ざく。鄭聲は淫し、佞人は殆し。

顏淵が邦を為（おさ）めるを問ふた。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「顏子王佐の才。故に天下を治むるの道を問う。邦を爲むと曰うは、謙辭なり。」と顏淵が謙って聞いた。子貢とはそこが違うといはんばかり。夏之時とは夏の暦を云ひ、乘殷之輅とは質実の風を云ひ、周之冕とは文質の備わるを云ひ、樂は韶舞とは舜の音舞、その人柄、美と善を尽くすを云ひ、鄭聲とは鄭に流行った新しい音曲、淫すとは、美と善から離れ、感情に直接訴えること、由緒正しき雅楽以外は放（放逐）するべし。佞人は遠ざくべし、佞人は殆（あやう）い、と先生はされた。孔子は理想の邦を述べた。顏淵なら分かるであろうと。

夏之時とは、集註に、「斗柄の初昏に寅を建（さ）すの月を以て歳首とするを謂う。天は子に開け、地は丑に闢け、人は寅に生ず。故に斗柄の此の三辰を建すの月は、皆以て歳首とす可し。而して三代迭（たが）いに之を用い、夏は寅を以て人正とし、商は丑を以て地正とし、周は子を以て天正とす。然れども時以て事を作（な）せば、則ち歳月自ら當に人を以て紀と爲すべし。故に孔子嘗て曰く、吾夏の時を得たり、と。而して說く者以て夏小正の屬を謂うとす。蓋し其の時の正と、其の令の善とを取りて、此に於て又以て顏子に告ぐ。」日月星辰を観測し、暦を管理することが王朝の第一の仕事であった。漢書律暦志に、「天を統べる北斗の柄は営室と織女の星を貫いて牽牛の初点を指す。この基準点によって日月の運行を決める。この基準点のある次（宿）が星紀。」とある。春秋時代には、初点は寿星でなく星紀とみていた。これは漢の暦（太初暦）が定まるまで続いた。太初暦が定まったときには、観測結果に基づき、この初点が玄枵（子）となった。」太陽による１年は恒星による１年より１年について約50秒の角度で早く、70年で約１度ずれるらしく、700年で10度となる。２万５千８百年で元にもどるため、１万２千９百年で冬の星座が夏の星座となる。星霜、の星で合わすと霜（季節）が狂う、霜（季節）で合わすと星が狂う。人間は夏寒く冬暑いという感覚には適応しずらく、季節を優先し、星を変える。司馬遷が天官書、律書を作成した頃と周初では、大雑把に13.6度（約950年）、殷初では20.7度（約1450年）季節が早くなる。2100年で30度つまり１月早くなる。天の運行（四季）に違わず王朝が民に農の時を正確に知らせることが、地上の王朝の第一義的役割。孔子の頃は周暦が合わなくなっており、夏の暦の方が合うとみたのであろう。

乘殷之輅は、集註に、「商の輅は木輅なり。輅は大車の名。古は木を以て車を爲るのみ。商に至りて輅の名有り。蓋し始めて其の制を異にす。周人飾るに金玉を以てすれば、則ち侈に過ぎて敗れ易し。商輅の朴素渾堅にして、等威已に辨ち、質にして其の中を得たりとするに若かざるなり。」とある。実用の用具は華美で壊れ易いものより、質がほどよく頑丈なものがよい。これは、車両のみならず武具全般、建物や生活用具全般に関するものであろう。

周之冕とは、集註に、「周の冕に五つ有り。祭服の冠なり。冠上に覆有り。前後に旒（りゅう）有り。黄帝以來、蓋し已に之れ有り。而して制度儀等、周に至りて始めて備われり。然して其の物爲るや小（すこし）きにして、衆體の上に加う。故に華なりと雖も靡と爲らず、費なりと雖も奢に及ばず。夫子之を取れるは、蓋し亦以て文にして其の中を得たりとすればなり。」とある。制度儀、にほどよく文が加わり、文質が備わること、周禮を云ふ。

[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/eirei.html)に曰く、「韶舞は舜の樂なり。周、六代の樂を用ふ。一に雲門と曰く、黄帝の樂なり。二に咸池と曰く、堯の樂なり。三に大韶と曰く、舜の樂なり。四に大夏と曰く、夏の禹の樂なり。五に大護と曰く、殷の湯の樂なり。六に大武と曰く、周の樂なり。」[八佾篇25](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/hachiitsu.htm))に「韶は美を盡し又善を盡すなり。」とある。
読書会：[2009年2月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年2月７日)

12）子曰人無遠慮必有近憂

zǐ yuē rén wú yuǎn lǜ bì yǒu jìn yōu

子の曰はく、人遠く慮ること無くば、必ず近くに憂ひ有り。

遠き慮（おもんばか）り、近き憂ひ、と読めば、先の先まで考える、将棋や囲碁で先を読むということ、そうしないとすぐに手詰まりを起こす、遠い将来のことまで考えないと、近いうちに心配事が起こってくる、となる。中国で遠慮といえば、周到な考慮。日本では、遠慮をしないようだと（控え目にしておかないと、あるいはうっかり立ち入ると）、いづれ近々、災いが降りかかってきますぞ、ともなる。集註に曰く、「蘇氏曰く、人の履（ふ）む所は、足を容るるの外は、皆無用の地爲り。而して廢（す）つ可からず。故に慮り千里の外に在ざれば、則ち患い几席の下に在り、と」自分の居るところ(自国)のことしか考えない、千里の外（他国）を知らぬと、そのことで脚下に災いを抱へることになる。と空間的に捉えることも可能である。しかし、遠く慮るとは、孔子とすれば、前条にあるごとく、方向としては未来でなく過去。遠く過去に起こったことを調べ、吟味し、比較すれば、今何故世が乱れているかが分かろうといふに。夏、殷、周の禮を研究すれば、何を執り、何を棄てるべきかが分かる。それをせずに時代に流され、下克上の風に染まっている。憂ふべき事態といふに、それに相乗りしてはばからぬとは、冉求を攻めてよし、と激烈な言葉を吐く先生であった。

[読書会：2009年2月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年2月12日)

13）子曰已矣乎吾未見好德如好色者也

zǐ yuē yǐ yǐ hū wú wèi jiàn hào dé rú hào sè zhě yě

子の曰はく、已矣乎（やんぬるか）吾、未だ德を好むこと色を好むが如くする者を見ざるなり。

[子罕篇17](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.doc))に、子曰已矣乎が加わったもの。色が男と女を結びつけ子を成すごとく、德が人と人を結びつけ禮が行はれるならよき社会が形成される。残念ながら、世は君と臣が対立するばかりが、臣が君にとって代わらんとする。君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり、それが素直に行はれるなら、泰平の世を百姓が享受できようものを。もうおしまいだな。
[読書会：2009年2月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年2月12日)

14）子曰臧文仲其竊位者與知柳下惠之賢而不與立也

zǐ yuē zāng wén zhòng qí qiè wèi zhě yú zhī liǔ xià huì zhī xián ér bù yǔ lì yě

子の曰はく、臧文仲、其は位を竊む者か。柳下惠の賢を知りて與に立たざるなり。

[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)に曰く、「位を竊むは、言うこころは、其の位に稱（かな）わずして心に愧ずること有り、盜み得て陰（ひそか）に之に據るが如し、と。柳下惠は、魯の大夫展獲、字は禽、邑を柳下に食み、諡して惠と曰う。與に立つは、之と竝びて朝に立つを謂う。范氏曰く、臧文仲政を魯に爲す。若し賢を知らざれば、是れ不明なり。知りて擧げざれば、是れ賢を蔽うなり。不明の罪小さきにて、賢を蔽うの罪大いなり。故に孔子以て不仁とし、又以て位を竊めりとす。」[公冶長篇18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm))でみたごとく、臧文仲に対しては「不仁な点が三つ、不知な点が三つある。」と、孔子は厳しい評価を下していた。「展禽（てんきん：柳下恵）を下位においたこと」を不仁の一つに挙げていた。

[読書会：2009年2月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年2月19日)

15）子曰躬自厚而薄責於人則遠怨矣

zǐ yuē gōng zì hòu ér bó zé yú rén zé yuàn yuàn yǐ

子の曰はく、躬自ら厚くして薄く人を責むれば則ち怨に遠ざかる。

集註に、「己を責むること厚し。故に身益々修まる。人を責むること薄し。故に人從い易し。人の得て之を怨まざるの所以なり。」とある。義疏も、「君子、己を厚く責め、小人、人を責むること厚し。人を責むること厚ければ、則ち怨の府と爲る。己を厚く責め、人に怨を見ず。故に怨に遠しと云ふ。」徳を厚く行う者であっても、わが身を厳しく責めることが出来ず、他人を責めるなら、人は従どころか怨むとみるようである。躬はわが身、自身、動詞で自ら行うこと、体を曲げて敬礼することでもある。自らを低くする。hòuは後でもある。素直に読めば、他人に厚く敬意を払い、自分のことを後にし、人を責めることを避けるならといふことであろう。臧文仲にその心あらば、といふところ。

[読書会：2009年2月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年2月19日)

16）子曰不曰如之何如之何者吾末如之何也已矣

zǐ yuē bù yuē rú zhī hé rú zhī hé zhě wú mò rú zhī hé yě yǐ yǐ
子の曰はく、これを如何んせむ、これを如何んせむと曰はざる者、吾、これを如何ともする末きのみ。

「憤せずば啓せず。悱せずば發せず（[述而篇8](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm)) 。」とあった。心がもんもんとはりさけそうになるから啓（ひら）かれる、それを吐き出そうとするから言葉が発せられる。これを如何ともする末（な）きのみ。いかな先生といへども、こればかりは教える事はできぬ。

[読書会:2009年3月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年３月７日)

17）子曰群居終日言不及義好行小慧難矣哉

zǐ yuē qún jū zhōng rì yán bù jí yì hào xíng xiǎo huì nán yǐ zāi
子の曰はく、群居して終日言ひ義に及ばず、好んで小慧を行ふ、難いかな。

「三人以上を群居を爲す、群居は共に聚（あつま）り説談する所有り」、と義疏にある。「小慧は私智なり。言義に及ばざるときは、則ち放辟邪侈の心滋（しげ）く、好んで小慧を行うときは、則ち險を行い僥倖するの機熟す。難いかなは、言うこころは、其の以て德に入ること無くして將に患害有らんとするなり。」と集註にある。放（わがまま）辟（ねじけて癖が悪い）邪（よこしま）侈（ぜいたく）。險は危ういこと。僥倖は利を求めてやまぬさま。一日中議論し、義について触れなることがない。鋭い論評あれど、義であるか論評を避け、私智に流れる云い放し、公論に非らざる。これでは成長は望めない。

[読書会:2009年3月7日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年３月７日)

18）子曰君子義以為質禮以行之孫以出之信以成之君子哉

zǐ yuē jūn zǐ yì yǐ wéi zhì lǐ yǐ xíng zhī xùn yǐ chū zhī xìn yǐ chéng zhī jūn zǐ zāi
子の曰はく、君子は義以て質と為し、禮以てこれを行ひ、孫以てこれを出で、信以てこれを成す。君子かな。

質は文質の質、中身のこと、君子とは、その性質が義。禮を以て行うと文が備わり、文質淋淋。孫は謙遜の遜、出は、言葉にあらわすとする説（鄭玄）から謙虚に話すとあるが、実際の行動においては一歩相手に譲る心掛け、と解した。言動に信ありて、義を成し遂げることができる。君子だなあ。つまり、心に義を抱いているだけでは足りない。禮に則り行うことができねば、粗略になり、伝はらない。人に義を迫ってみても、信なくば成ることはない、となろうか。
[読書会：2009年3月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年３月12日)

19）子曰君子病無能焉不病人之不己知也

zǐ yuē jūn zǐ bìng wú néng yān bú bìng rén zhī bù jǐ zhī yě
子の曰はく、君子は能くすること無きを病まむ。人の己を知らざるを病まざるなり。

君子は己が無能を病（や）む。もし、有能であるならば、それが人に知られないとしても病むことはない。病とは、説文に「疾加わるなり」とあり、礼記、檀弓に、「曾子、疾に寝（い）ねて病（へい）なり。」とあり、疾の甚だしい状態。心理においては、憂慮する、苦しむこと、やましい気持ちにも用ゐられる。
[読書会：2009年3月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年３月12日)

20）子曰君子疾沒世而名不稱焉

zǐ yuē jūn zǐ jí mò shì ér míng bù chèn yān
子の曰はく、君子、世を沒りて名、稱せられざるを疾まむ。

疾はもと創傷、矢を射られた傷、やまいに用いられ、にくむ、なやむ、はやいの義にも用いられる。沒は亡くなること、おわると訓じられる。有能か無能かの判断基準は、世に名を称せられるかどうかにある。人に知られないことは病むことはないが、人に称せられないことは疾む。集註は、「世を沒うるまで名を稱せられざるときは、則ち善をするの實無きこと知る可し。」とする。義疏は、「匠、年を終へ斧を運（もち）ひ能く器成らざる、匠者之を病む、君子年を終へ善を爲して能く名を成さざる、亦、君子之を病むなり。」とする。善を為さざる、人の役に立たないことを無能とする。
[読書会：2009年3月12日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai4.htm#2009年３月12日)

21）子曰君子求諸己小人求諸人

zǐ yuē jūn zǐ qiú zhū jǐ xiǎo rén qiú zhū rén
子の曰はく、君子は諸を己に求め、小人は諸を人に求む。

諸とは何か。流れからすれば、世を沒りて名を称せられないこと。君子はそれは己が無能であったとするが、小人は人のせいにする、と集註はみる。義疏は、「君子は自ら己、徳行の不足を責め、人を責めざるなり。小人自ら己を責めずして人に之を責むなり。」とする。

[読書会：2009年3月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html)

22）子曰君子矜而不爭群而不黨

zǐ yuē jūn zǐ jīn ér bù zhēng qún ér bù dǎng

子の曰はく、君子は矜にして爭はず、群すれど黨せず。

矜(おごそか)にする、矜持（きょうじ）すること。集註は、「莊以て己を持（たも）つを矜と曰う。然れども乖戾の心無し。故に爭わず。和以て衆に處るを羣と曰う。然れども阿比の意無し。故に黨せず。」莊とはおごそかなこと。乖戾(かいれい)はもとる、そむくこと。羣は群。阿比はおもねりへつらうこと。毅然として己を保つが、人と争うものではない。人と距離を置くものではなく、一緒に行う。しかし、己を偽り、人に取り入ったり、へつらったりすることはしない。
[読書会：2009年3月19日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html)

23）子曰君子不以言舉人不以人廢言

zǐ yuē jūn zǐ bù yǐ yán jǔ rén bù yǐ rén fèi yán
子の曰はく、君子は言を以て人を舉げず、人を以て言を廢てず。

[公冶長篇10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm))に、「始め吾、人においてや其の言を聽きて其の行を信ず。今、吾、人においてや其の言を聽きて其の行を觀る。」とあった。言を聴きその行を観て舉げる。人を以て言を廢（す）てるとは、坊主悪（にく）けりゃ袈裟まで悪い、義疏は、「人の卑賤によりその言を不可とし、その美言を廢て用ゐない。」となす。言を廢（す）ず、嫌いな人、敵対する人、批判を浴びせる人、自分より劣ると思う人間の言には耳をかさない。聴くまでも無く廢てる。君子は、その言を廢（す）てず。

読書会：[2009年3月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年3月28日)

24）子貢問曰有一言而可以終身行之者乎子曰其恕乎己所不欲勿施於人

zǐ gòng wèn yuē yǒu yì yán ér kě yǐ zhōng shēn xíng zhī zhě hū zǐ yuē qí shù hū jǐ suǒ bú yù wù shī yú rén
子貢、問ひて曰く、一言にして以て終身行ふべき者有るか、子の曰はく、其れ恕か、己が欲さざる所人に施すこと勿かれ。

子貢が一生をかけて行うべきことで一言で言い表せるものがあるかを問うた。[里仁篇15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm))で孔子が、「吾が道、一を以てこれを貫く。」と云ひ、曾子が「はい」と返事し、孔子は外出した。弟子にその意味を聞かれ、曾子は忠恕だと教へている。忠は行う者の心がけ、つつしみて、まごころを尽くすこと。恕は相手への心がけ。相手の心を推し量ること、相手の立場にたつこと。子貢には、同篇3)で「予は一を以てこれを貫く」と念を押している。曾子はそこを分かっていたが、子貢はそこが分かっていない、といふか、疑問を抱いていたのであろうか。[子路篇15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/siro.doc)) で定公が「一言」で邦を興すことが出来るような言葉があるかを聞いた時、孔子は一言ではないがそれに近い言葉があるとして、君たることは難しく、臣たることも容易でない、このことを自覚するなら邦を興すに近い、と述べたことがある。孔子の一を忠恕で本当に表せるのであるか、子貢は確かめてみたかった。「有一言而可以終身行之者乎」そんな便利なものはないが、近いものがある、風の答えを予測していると違った。[公冶長篇12](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koyacho.htm))において、子貢が、人からされたくないことは人に対してもしない、と言ったとき、孔子はお前の及ぶところでない、頭で分かっているようなことを云うが、実際の行動ができていない、と叱責したのであろう。孔子は子貢には忠はあるが、恕に欠けるという思ひがあった。
読書会：[2009年3月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年3月28日)

25）子曰吾之於人也誰毀誰譽如有所譽者其有所試矣斯民也三代之所以直道而行也

zǐ yuē wú zhī yú rén yě shuí huǐ shuí yù rú yǒu suǒ yù zhě qí yǒu suǒ shì yǐ sī mín yě sān dài zhī suǒ yǐ zhí dào ér xíng yě
子の曰はく、吾の人に於けるや、誰をか毀り、誰をか譽めん。如し譽む所有るは其れ試みる所有らむ。斯の民や、三代の直道にして行なふ所以なり。

人に於けるの人は特定されない人、孔子が普段接している人以外の普通の人、田舎の人と思はれる。誰毀誰譽はそういふ人を毀（そし）ったり、譽（ほ）めたりしないこと。もし譽めるならば、それは試してそうとわかってからのことである。直道而行の道の解釈であるが、道（いふ）としたい。直は道にも行にもかかり、まっすぐに言うて行ふ、裏表無く素朴に生きる、三代とは夏、殷、周であり、農村の民はそういふものであったとなろうか。斯の民とは、今の田舎の民となろう。

読書会：[2009年3月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年3月28日)

26）子曰吾猶及史之闕文也有馬者借人乘之今亡矣夫

zǐ yuē wú yóu jí shǐ zhī quē wén yě yǒu mǎ zhě jiè rén chéng zhī jīn wú yǐ fú
子の曰はく、吾、猶ほ史の文を闕き、馬有る者は人を借りてこれに乘るに及ぶなり、今、亡きか。

吾猶及は、集註は、「猶之を見るに及ぶ。」とみている。孔子はそういうことを見てきたし、そういう人が居たとする。史家は疑はしきことは書かず空欄とす、は意味が明瞭であるが、実行することは非常に難しい。君主に、含むところありとみなされ、罷免されかねなく、あるいは、無能と思はれかねない。馬を持つ人は、人を借りてこれに乗るは、これだけでは何のことか分からない。人に貸してこれに乗らしむと集註はする、借は借りると貸すに通じる。有るものは独り占めせず貸して役に立てるとなろうか？「胡氏曰く、此の章の義疑わし。強いて解す可からず、と」とある。貝塚先生は、猶を可とし、後段を馬があって、自分で乗れなければ、誰かに乗せてもらって道を行く、とされた。今はもうそういふことが見られない、と孔子は申された。前段は、疑はしきは断定せず、後段は持てるものは分かち合う方向か。之に乗るを馬に乗るとみているが、孔子の場合、乗ると云へば車、輿。馬を持つ人は御者を借りて輿に乗る、知識を持つものは、これを人に分かち、ともに行く、とでもなるのか？判然としない。前条と関連し、素朴なまことが失はれていることをいふと思はれる。
読書会：[2009年4月4日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年4月4日)

27）子曰巧言亂德小不忍則亂大謀

zǐ yuē qiǎo yán luàn dé xiǎo bù rěn zé luàn dà móu
子の曰はく、巧言、德を亂す。小、忍ばざれば則ち大謀を亂す。

集註は、「巧言は、是非を變亂す。之を聽けば人をして其の守る所を喪わしむ。小不忍は、婦人の仁、匹夫の勇の如き、皆是れなり。」とする。孔子は「巧言令色、鮮矣仁。[学而篇3](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/gakuji.htm))」とし、集註は巧言令色は、「則ち人欲肆（ほしいまま）にして、本心の德亡ぶ。」とみた。巧言は相手の自尊心をくすぐり、その気にさせてしまう。わずかな器を大器と思はせ、わずかの徳を大徳と思はせ、その調子で実行させられるや、足元をすくわれ、一杯かつがれたことを思ひ知る。無いものを有ると思い込むは、亂德である。小さなことは忍ばないと大謀は亂れる。間違いが生じたとき、私の責任でないと言いたくなるのが人情、間違いを挽回するより責任逃れが先行すれば、事は成らない。出来る女性は、馬鹿な男のやったことで、責められることに我慢がならない。十分準備もせず、出来ると過信する匹夫の失策には、私には関係ありません。旦那には、そんなことでできると思っていたの。もういくつになったの、まだ分からないの！枯れたかなと思っても、水をやり根気よく待てば育つものです。
読書会：[2009年4月4日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年4月4日)

28）子曰眾惡之必察焉眾好之必察焉

zǐ yuē zhòng wù zhī bì chá yān zhòng hào zhī bì chá yān
子の曰はく、眾これを惡む、必ず察す。眾これを好む、必ず察す。

眾は衆、大勢が惡(にく)む、大勢が好む、これは何か普通のことじゃないので、必ずその理由を察する。「觀其所由察其所安、[為政篇10](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm))」察は宀と祭からなり廟で神意をうかがうことが原義。よく観察する、つまびらかに明らかにする。衆の好悪は、時代の風潮である。季氏が八佾の舞を行ふも、泰山で祭るのも時流、[子罕篇3](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/sikan.doc))で孔子は、麻冕（麻の冕：正式）を純（黒絹の簡略なもの）とするのは儉（倹約）であり、衆に從ふ。堂の下に拜するのが禮であり、今の人々が上に拜するは、君主の行ふ泰であり、衆に違ふと雖も、私は下に拜するとしている。下克上に流れる風潮には異を唱へた。

読書会：[2009年4月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年4月11日)

29）子曰人能弘道非道弘人

zǐ yuē rén néng hóng dào fēi dào hóng rén
子の曰はく、人能く道を弘む、道人を弘むに非ず。

人は己一人にて道を極めたと思ふことがある。道の命ずるままに無心にその道を辿り、自得した。自然には人間の思ひなしと関係なく貫徹する法則があり、そのあるべき姿をひたすら探し求めて、その法則に至った、道は偉大なり。どちらかと云へば、無為自然。集註は、「弘は、廓（ひろ）めて之を大いにするなり。人の外に道無く、道の外に人無し。然れども人の心は覺有りて、道の體はすること無し。故に人能く其の道を大いにして、道其の人を大いにすること能わざるなり。」とする。人は道を弘める努力をすることができる。営々たる先人の営みにより開かれた道があり、それが己一人の能力で到達できたと思ふのは驕りである。その先は、誰かが道を開くからこそ、弘むのであり、勝手に開けるものではない、とみる。孔子の努力は、当世においては、諸侯には受け入れられなかった。しかし、孔子が弘めた道は、漢帝国に採用され、以降、大きな道となった。

読書会：[2009年4月11日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年4月11日)

30）子曰過而不改是謂過矣

zǐ yuē guò ér bù gǎi shì wèi guò yǐ
子の曰はく、過ちてこれを改めざる。これ過ちと謂ふ。

[学而篇8](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/gakuji.htm))と[子罕篇24](http://www.kyoto.zaq.ne.jp/dkanp700/koten/sikan.doc))に、「 過てば則ち改むるに憚かること勿れ。」とある。孔子は人間は過ちをするものと見ている。過の字源は咼（死者の残骨）と辶（みち）からなり、道路における死者の禍を除く呪儀（字統）。一つは禍（わざわひ）につながるものがある。過ぎたるは及ばざる([先進篇15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/senshin.doc))、行き過ぎも及ばずも同じく改めねばならぬ、でやり過ぎるにつながるものもある。自ら間違いをしたとわかる過ち（掟や約束を破る）もある。人から指摘されて気付く過ちもある。これを改めるといふ事は容易ではない。更に難しいのは、己が気付かぬ場合である。子路が孔子に弟子入りした様子が「孔子家語」に記されている。
孔子が子路に「何を好むか」と問うと、「長剣」と答へている。孔子が学をすすめると、「学に何の益があるか？」と答へた。孔子が、「君主にして諌める臣がなければ正を失ふ。士にして教へる友なければ聴を失ふ。狂馬を御すには策（むち）を釋（す）てず（手放さず）、弓を操るには檠(ゆだめ)に反（そむ）かず（材の曲がっているのを矯正して強い弓となる）、木は縄を受ければ直く（墨縄で印しをつけて真直ぐに切る）、人は諌を受ければ聖となる。学を受けて重ねて問はば、孰（た）れか順ならざらんや。仁を毀（やぶ）り仕を悪（にく）まば、必ず刑に近づく。君子は学ばざるべからず。」と言ふと、子路は、「南山に真っ直ぐ伸びた竹があり、これを切って（槍に）もちいれば、犀の皮すら貫ける・・・素直な性格のまま、真っ直ぐ生きることのどこが悪い」と反論する。孔子は、「削って羽根をつけ、鏃（やじり）を付け磨けば、もっと深く入るではないか」と答へる。子路は弟子入りを決断した。自分を諌めてくれる人間を持ち、苦言を受け容れ、自らを改める、子路にはその質があった。これを磨くものが学であると孔子は説いた。

読書会：[2009年4月16日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年4月16日)

31）子曰吾嘗終日不食終夜不寢以思無益不如學也

zǐ yuē wú cháng zhōng rì bù shí zhōng yè bù qǐn yǐ sī wú yì bù rú xué yě
子の曰はく、吾嘗て終日、食さざる。終夜、寢ねず以て思へらく、益無し。學ぶに如ざるなり。

集註は、「此れ思いて學びざる者の爲に之を言う。蓋し心を勞して以て必（もっぱ）ら求むるは、志を遜（へりくだ）りて自ら得るに如かざるなり。」とする。[爲政篇15](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm)）に「學びて思はざれば則ち罔し。思ひて學ばざれば則ち殆し。」とあった。孔子は嘗てとは何時であろうか、おそらく若い頃であろう。一日中食わず、寝ず思いを巡らせた。己が思索の限りを尽くしてみんとした。己が誰で、どこから来て、何で名を為したいのか？陽貸(虎)の誘ひに乗るべきか？彼と一緒になり三桓子を押さえ込めば、新たな政治の道が拓けるのか？定公の政治を復興出来るのか？自らの心の奥底を探り、何を逡巡しているのか、何にこだわっているのか、さ迷った。ぐるぐる巡るばかりで収拾がつかなかった。「詩」と「書」を読み返してみた。心が定まってきた。己が目指していたのは周公、己の志を疑った成王に対しても、まことを尽くし成王をたて周道を樹立した周公ならば、陽貸とは結ぶまひ。荻生徂徠は一人の思索の力は、先王の道を学ぶに如かず、とみた。

読書会：[2009年4月16日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年4月16日)

32）子曰君子謀道不謀食耕也餒在其中矣學也祿在其中矣君子憂道不憂貧

zǐ yuē jūn zǐ móu dào bù móu shí gēng yě něi zài qí zhōng yǐ xué yě lù zài qí zhōng yǐ jūn zǐ yōu dào bù yōu pín
子の曰はく、君子は道を謀りて食を謀らず。耕やすなり、餒、其の中に在り。學ぶなり、祿、其の中に在り。君子は道を憂へ貧を憂へず。

集註は、「耕すことは、食を謀る所以にして、未だ必ずしも食を得ず。學ぶことは、道を謀る所以にして、祿は其の中に在り。然れども其の學ぶや、道を得ざるを憂うるのみ。貧しきを憂うるとする故、而して是をして以て祿を得んと欲するに非ざるなり。」とする。謀は、元来は神意をはかって事をなすこと、ある目的を達成するために心を用いること。君子が求めるは道であって食ではない、荻生徂徠は、「謀は、求めるなり。」とした。食を求めて耕したから食を得られるとは限らず、餒（うえ）ることとてある。餒は腹がすいてぐったりする、魚がどろんとして腐りかけていることでもある。土作り、水、肥料、天候不順、病害等々収穫まで様々なハードルがある。[為政篇18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/isei.htm))子張が「祿を干むるを學ぶ」とあり、孔子が、「言尤寡く行悔寡くば祿は其の中に在らむ。」と答へたことがここの解釈に大きく影響する。耕しても食にはありつけるか分からないが、學ばば禄を得るとする解釈が多いようである。土を耕さずとも、學びて祿を得ることもある。食を謀ったとて思い通りにはゆかないことはどっちも同じ。君子は貧であることを憂へてはいけない。「朝に道を聞かば、夕べに死すも可なり。[里仁篇8](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rijin.htm))」[顔淵篇7](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/ganyen.doc)）に政とは、「食足し兵足し民之を信ずこと。」しかし、やむを得ず、兵を捨て、食を捨てることがあっても、民に信無くば国は立たなくなる、それが政（まつりごと）と孔子は言ふ。国を運営するには、生きるに食せねばならぬように、国を運営する知が不可欠である。君子が食のために道を捨てれば、国は成り立たない。政治家の汚職は亡国の最たるものと言ふべし。

[読書会：2009年5月2日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月2日)

33）子曰知及之仁不能守之雖得之必失之知及之仁能守之不莊以涖之則民不敬知及之仁能守之莊以涖之動之不以禮未善也

zǐ yuē zhì jí zhī rén bù néng shǒu zhī suī dé zhī bì shī zhī zhì jí zhī rén néng shǒu zhī bù zhuāng yǐ lì zhī zé mín bú jìng　 zhì jí zhī rén néng shǒu zhī zhuāng yǐ lì zhī dòng zhī bù yǐ lǐ　wèi shàn yě
子の曰はく、知これに及び、仁能くこれを守らずんば、これを得ると雖も必ずこれを失ふ。知これに及び、仁能くこれを守り、莊を以てこれに涖ばざれば、則ち民敬しまず。知これに及び、仁能くこれを守り、莊を以てこれに涖み、これを動かすに禮を以てせざるは未だ善からず。

前条で、「學也祿在其中矣」とあった。諸君が學びて祿を得たとしよう。知により仕官に及んだ。しかし、仁でそれを守ることが出来なくば、得たとしても必ず失う。仕官に及び、仁にしてこれを守ることが出来ても、莊（おごそかさ）をもって民に涖（のぞ：臨）まねば民は敬（つつし）まず。仕官に及び、仁にしてこれを守り、莊にして民に涖むとしても、それを動（はたらか）すに禮を用ゐることができねばまだまだ善とは云へないなあ。就職のためのみに諸君に教へているのではない。政治を行ふあり方をよくよく自問いただきたい。動之を古注は自ら動く、行うとみるが、集註は民を動かすとみた。動は働の初文とされ、古注をとった。
読書会：[2009年5月9日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月9日)

34）子曰君子不可小知而可大受也小人不可大受而可小知也

zǐ yuē jūn zǐ bù kě xiǎo zhī ér kě dà shòu yě xiǎo rén bù kě dà shòu ér kě xiǎo zhī yě
子の曰はく、君子は小知す可からずして大受す可きなり。小人、大受す可からずして小知す可きなり。

小知と大受の比較である。[集註](http://mokusai.web.infoseek.co.jp/shushigakukihonsho/rongo/rongo_main.html)は、「此れ人を觀るの法を言う。知は、我之を知るなり。受は、彼受くる所なり。蓋し君子細事に於ては未だ必ずしも觀られる可からずして、材德以て重きを任ぜらるるに足る。小人器量淺狹なりと雖も、未だ必ずしも一長の取る可きもの無きにあらず。」とする。知は仕事の内容を知ること、受は仕事に任ぜられること、君子は大任を引き受け、仕事を知る人を任命する。小人はそうではなく、与えられた仕事に精通するようにせよ、となる。[義疏](http://homepage1.nifty.com/chinaclassic/giso/eirei.html)は、「君子の道深遠にして、凡人あづかりて知る可からざる、故に、小知す可からざるなり。徳能く深く物を潤ほし、物これを深く受く。故にしかして大受す可きなりと云ふ。」とする。凡人の小知では君子の道は分からない。君子の徳は世を潤し、太陽を受けて物が育つように、物はその恩恵を受けている。民は知らず知らずその恩恵を受けている、といふ風にみている。受とは「受命」であり、天命を受けるの方向。天命とは、天帝の意を受け民の安寧を守ることである。これを小人が受けることは有り得ないこと。一国の政治を受けるものは諸侯であり、家老や大夫ではない。下克上で家臣が一国を治めるは大受に非ず。
読書会：[2009年5月9日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月9日)

35）子曰民之於仁也甚於水火水火吾見蹈而死者矣未見蹈仁而死者也
zǐ yuē mín zhī yú rén yě shèn yú shuǐ huǒ shuǐ huǒ wú jiàn dǎo ér sǐ zhě yǐwèi jiàn dǎo rén ér sǐ zhě yě
子の曰はく、民の仁に於けるや水火に於けるに甚し。水火吾蹈みて死する者を見る。未だ仁を蹈みて死する者を見ざるなり。

義疏は、「甚猶勝也」、甚は勝（まさ）ると同じとする。「仁と水と火の三事は、皆、民人、仰ぎて以て生くる所の者なり。」つまり、水が無く、火が無ければ生活ができないように、仁がなければ社会生活は成り立たないとする。先生は、水、火より仁の方がより勝るとされた。水や火は恩恵を与える一方、これに踏み込むと命を失うことがある。しかし、そう読むと、仁に踏み込んだとて、命を失ふことはない、仁の恩恵ははるかに素晴らしいと、妙な終わり方になる。そこで、王弼（おうひつ）は甚を甚しく敬遠す、民は水･火を恐れて敬遠するが、仁となるともっと敬遠す、水火に飛び込む者を見るが、仁に飛び込む者はいない、と釈した。これも妙な終わり方である。
　小知によれば、水と火は、正しく用ゐれば人間に利があるが、使い方を間違えば、命を落とすこともあり、注意が必要である。仁をなすことは大切ではあるが、度を過ごすと利を損なひ、馬鹿にされることになり、注意を要する、となる。大受となれば、太古、水と火は人の統御できるものでなく、洪水や火災の被害に苦しんできた。聖人が、苦心に苦心を重ねて、治水を行ひ、発火具や竈を工夫し、生活に生かす方法を見出した。しかし、油断すれば何時命を落としても不思議は無い。太古、社会を形成する以前の人間は獣と大差なく、縄張りを侵すものとは殺しあった。しかし、聖人が現れ、水や火や道具を用ゐ、栽培や畜産を行ひ、住居を持ち、掟をつくり、殺したものには死を、傷つけたものには傷を、盗んだものには弁済を、罪には償いをさせ、社会生活を営むことをはじめると、無闇に殺し合ふことを避けるようになった。お互いが安寧に暮らすこと、これが仁のはじまりである、これなくして無秩序、弱肉強食の世界に戻れば、人は一瞬たりとて安らかに暮らすことはできない。そこに踏み込んで命を落とすことはない、君子が仁を広めるのはその任である。
読書会：[2009年5月23日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月23日)

36）子曰當仁不讓於師
zǐ yuē dāng rén bú ràng yú shī
子の曰はく、仁に當りて師に讓らず。

集註に、「仁に當っては、仁以て己が任と爲すなり。師と雖も亦遜（ゆず）る所無し。言うこころは、當に勇み往きて必ず爲すべし、と。蓋し仁は、人の自ら有する所にして、自ら之を爲して、爭うこと有るに非ず。何の遜ることか之れ有らん。」とす。徂徠は「己が任」に非ず、「民を救い民を安んじること」それに関しては緩めてはならない、師がどうのこうのといふ次元ではないとした。師とは誰か？孔子のことか？それなら、弟子に、こればかりは、私に遠慮することなく行へ、と言ったことになる。そんなことを申されたのか？孔子の師は誰とは定められない。周公であっても、孔子は仁にあたっては譲らない。身のほど知らずの馬鹿と陰口をたたかれようと譲らない。まさに受仁といふべき使命を果たさんとされた。
読書会：[2009年5月23日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月23日)

37）子曰君子貞而不諒
zǐ yuē jūn zǐ zhēn ér bú liàng
子の曰はく、君子は貞にして諒せず。

集註は、「貞（てい）は、正しうして固し。諒（りょう）は、則ち是非を擇（えら）ばずして信を必とす。」とする。貞は易の言葉で変わらないこと、恒常的なことで、正しいこととされる。諒は、[憲問篇18](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/kenmon.doc)）に「豈に匹夫匹婦の諒を為すや」とあるごとく、論語では、世間で信義とされることに義理立てすること。不諒を了解を求めないと釈するようでもある。徂徠は、貞は自分の「内にある変わらないもの」、諒は「信ぜられることを人に求めること」とする。世間の人が分かってくれないとしても、こうあるべきことは固く貫く、季氏が泰山で祭りをするのを止めようとし、斉での下克上を討つべく哀公に進言し、三桓氏にまで進言した。衛の霊公の跡継問題について、第一にすべきは名を正すこととし、形式化し廃した毎月の犠の羊を惜しむなと批判し、世間が堂の上で拝するようになっても、堂の下で拝す、と冉有や子貢や子路が現実離れしていると思ひ、世間が陰口をたたこうと、貞たらんとされた。
読書会：[2009年5月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月28日)

38）子曰事君敬其事而後其食
zǐ yuē shì jūn jìng qí shì ér hòu qí shí
子の曰はく、君に事りて、其の事を敬し、しこうして其の食を後にす。

君に事（つこうまつ）る、君は仕事の内容を熟知しているわけではなく、任す適任者を選ぶことが仕事である。選ばれた者、仕へる者はその仕事に相応しい働きをしなくてはならない。己の能力以下のしょうもない仕事と軽視をしたり、己に余る仕事と怖気づき逃げ出すも、事は成らない。その仕事ぶり、その結果、また、育成した後継者の仕事ぶりを評価して、さらなる仕事に抜擢されるか、留まるか、左遷されるか等々が決まる。それによって食がついてくる。よき仕事にはよき食が、悪しき仕事には悪しき食が支給される。食とは禄とされる。そうありたいものである。孔子の場合、そうしたはずであるが、事る君に問題があったのか、孔子自体に問題があったのか、最後までそうならなかった。
読書会：[2009年5月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月28日)

39）子曰有教無類
zǐ yuē yǒu jiào wú lèi
子の曰はく、教有らば類無し。

類は種類といふのが伝統的解釈である。集註は善悪の異なる人間とし、義疏は身分や出身による貴賎、庶鄙としている。放置しておけばその差は埋まらないが、教育により、その差がなくなる。朱子は人の性は元来が善であるが、気習に染まって異なるもので、これを教へ、善を得ることで類が無くなるとした。その理由づけは人により解釈が異なろう。言葉のひびきには、「どうして類にこだわるのか、それは汝が教へようとしないからだ。」といふ強いものがある。[述而篇28](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/jutsji.htm)）に、「互郷與に言い難し。童子見ゆ。門人惑えり。」とあった。先生は学ぼうとする者には、「其の進に與（くみ）すなり・・・・己を潔くし以て進めば、其の潔に與すなり。」と、教へて倦むことはなかった。
読書会：[2009年5月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月28日)

40）子曰道不同不相為謀
zǐ yuē dào bù tóng bù xiāng wéi móu
子の曰はく、道同じからざれば、相ひ為に謀らず。

これも苦い経験から学んだことであろう。昔、陽貨（虎）に誘はれこれは思いとどまったが、公山弗擾（こうざんふじょ：[陽貨篇5](yoka.docx)）に誘はれたときは、自らの力を発揮すれば、周公の政治を行うことが出来るのではないかと思ひ、佛肸（ひつきつ：[陽貨篇7](yoka.docx)）に召されると、じっとしておれない気持ちになったことがあった。子路が反対し実現しなかったが、季氏の政治を止めるところまでは道は同じだが、その先は違った。魯公に政権を取り戻す方向の孔子は、下克上の陽貨や佛肸を説得して正すことが出来ようと密かに自信を持っていた。これは、子路の直感の方がはるかに事態を見抜いていた。衛公を補佐するためには、南子から正さねばと出かけた先生であるが、逆に利用される始末で、子路が怒るのももっともであった。楚の葉公、昭王とも結局は道が違った。葉公に会った子路は、何も言わずに引き上げてきた。周公の政治と覇者の政治では道が異なる。有教無類であるが、道が異なる者、志が異なる者、それを謀るところは同じに導くとは、やはり無理があった。
読書会：[2009年5月28日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年5月28日)

41）子曰辭達而已矣
zǐ yuē cí dá ér yǐ yǐ
子の曰はく、辭は達するのみ。

それにしても、この短い言葉、辭は達するのみ、とは達していないことをいふ。心に響かない。集註は、「辭は意を達するを取りて止む。富麗を以て工と爲さず。」とし、義疏は、「言語の法、辭を使て其の事を宜しく達しむるに足るのみ、其の言に美奇を須（もと）め以て事の實に過ぎず。」とする。韻や奇をてらったり、美文にこだわるよりは、すっきり意味が通る言葉がいいと釈される。しかし、率直に語ればよいといふことでもないようである。徂徠は儀禮の「聘禮（へいれい）」を引き、外交交渉における使者の口上が、美奇に流れることを戒めたものとみた。「辭は常なし。孫（したが）って説（よろこ）ばしうす。辭多きときは則ち史なり、少なきときは則ち達せず。辭は苟（いやし）くも以て達するに足る。義の至りなり。（外交交渉の使節にあっては、辭に決まった口上はなく、相手を喜ばす言辞を用ゐた。辭が多いと史<文が質に勝る>となり、少ないと通じない。辭は達することが必要であり、義が伝はらねばならない。」これは、むしろ、左伝、襄公二十五年の、「仲尼曰く、志(古書)に之有り、言は以て志を足し、文は以て言を足す。言はざれば誰か其の志を知らん。言の文無きは、行はれて遠からず。（心に抱く思ひは、言葉に出して言はねば分からないが、言へばいいというものではない。文がなければ、行われても遠くまで伝はらない。言うべき質があり、文で整へられねば、遠く伝はることはない。）」に近い。辭が達っするには、素直に率直に自分の思ひを述べるだけでなく、相手を慮り、相手も納得する言葉でなくば伝はらない、といふことであろう。
読書会：[2009年6月6日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年6月6日)

42）師冕見及階子曰階也及席子曰席也皆坐子告之曰某在斯某在斯師冕出子張問曰與師言之道與子曰然固相師之道也
shī miǎn xiàn jí jiē zǐ yuē jiē yě jí xí zǐ yuē xí yě jiē zuò zǐ gào zhī yuē mǒu zài sī mǒu zài sī shī miǎn chū zǐ zhāng wèn yuē yǔ shī yán zhī dào yú zǐyuē rán gù xiàng shī zhī dào yě
師冕見ゆ、階に及ぶ。子の曰はく、階なり。席に及ぶ。子の曰はく、席なり。皆坐す。子これに告げて曰はく、某ここに在す、某ここに在す。師冕出ず。子張、問ひて曰く、師と言ふ道か。子の曰はく、然り固より師を相く道なり。

集註に、「師は樂師、瞽者。冕は名。」とある。孔子は樂師から「詩経」を習ったとされる。孔子自らで出迎へ、庭から堂（座敷）へ導く。相（たす）くとは瞽者を介添へして導くこと。庭から堂に上がるには、東西に階段があり、客は東の階段より迎へた。階段の前き来ると階段です、敷物をひいた席に着くと席です、ここには誰それが、ここには誰それが居ますと告げる。演奏が終わって師冕が退出された後に、若い子張が問ふた。吉川幸次郎先生によれば、「與師言之道與」には言い方に冷淡さがあるそうで、先生の申された言葉は、「然固相師之道也」固（もと）よりはあたたかさのある言い方、孔子の伝統に対する尊敬、人間への愛情があらわれている、とされる。
辭は達するのみとはこの先生の対応であり。瞽者がその都度、一番聞きたいと思ふことを的確に述べる。目が見えている人間も、目に見えない心の声に聞き耳をたてているはずである。先生はそれに相応しい辭を述べるが、瞽者に通じるように通じない。子張に対して、「然是道也」でなく「然固相師之道也」と答へられた。この篇6）で先生は若い子張に、「言忠信行篤敬」を車の運転に集中するがごとくに、心に抱くことを教へられ、子張はそれを帯に記した。今回も子張に「辭達した」であろうか？
読書会：[2009年6月6日](http://hjueda.on.coocan.jp/koten/rongodokushokai5.html#2009年6月6日)

了　2009.06.06